

アドルフォ・サルコリの演奏活動について — 海外を中心に —

The performances of Adolfo Sarcoli.
Outside of Japan

直江学美
Manami NAOE

〈要旨〉

筆者はこれまで、演奏会のプログラムや音楽雑誌をもとに、サルコリ（1868-1936）や弟子たちがサルコリの日本滞在中（1911-1936）に行った主な演奏活動について明らかにしてきた。しかしこれまで、日本に突如やってきたサルコリが来日以前どのような活動をしていたのかは十分に明らかではなく、日本でいわれていたように、世界中で活躍し、六大テナーとまで言われた歌手であったことを裏付ける資料はまだ見つかってはいない。

筆者は2000年、2010年にサルコリの生まれ故郷であるイタリア・シエナにおいて、そして、2012年にはサルコリが来日前に住んでいたとみられるミラノで現地調査を行った。本編では、その際収集した史料をもとに、サルコリがおこなった、海外での演奏活動の一端を明らかにしたい。

〈キーワード〉

アドルフォ・サルコリ、西洋声楽受容、イタリアオペラ、シエナ、ミラノ

1 はじめに

日本で確認できる、サルコリの海外での演奏活動は多くない。筆者は『日本の演奏会プログラムより見た西洋声楽受容の一考察』⁽¹⁾（直江学美 2010）にその一部を明らかにしたが、来日以前の情報や内容は非常に限られており、手掛かりとなる主たる資料は、弟子が行った「謝恩大演奏会」のパンフレットである。しかし、そのパンフレットに掲載された写真に見られる、当時存在したであろうプログラム等も、現在はほとんど所在が確認されていない。

先の論文でも指摘したように、サルコリが来日以前にどのような活動を行っていたのかの調査は、サルコリの日本における意義や特質を明らかにするためには欠くことができない。

そのような問題意識から、著者は、2000年、2010年、そして2012年にイタリアで現地調査を行った。本研究では、それら調査により収集した史料に基づいて、海外でのサルコリの演奏活動歴の一端を明らかにし、サルコリの人物像に組み込んでいきたい。

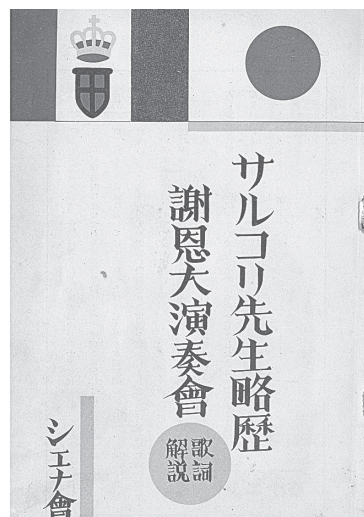
2 アドルフォ・サルコリの演奏活動

2-1 「サルコリ先生略歴」にみる演奏活動

日本でみることができる、サルコリのイタリアでの略歴

や海外での音楽活動歴は限られており、いずれも、記載内容から、本人の口から弟子たちに伝えられた伝聞、もしくは、当時存在していたプログラム等からの抜粋、引用と思われる。

現存する、サルコリの日本国外での活動の様子がまとめられている唯一の記事は、1933年12月5日にシエナ会が行った「謝恩大演奏会」⁽²⁾のパンフレット（写真1）である。全11頁からなるパンフレットの中には「ア・サルコリ—先



（写真1）「謝恩大演奏会」パンフレット（1933）

生に就て」との見出しで、サルコリの国外での活動歴が記載されている(写真2)。

先生最近健康勝れられず年来薬餌に親しまれ晩年漸く寂寥の思ひが致しますので私達一同先生の故郷伊太利「シエナ」の名のもとに集ひこゝに謝恩の一端を表はす演奏會を催し老師の病床を慰さめんとした…(「謝恩大演奏會」1933)。

パンフレットの冒頭、挨拶文からは、サルコリの健康状態が良くないこと、病床のサルコリを慰めるために弟子たちが集い、サルコリの故郷シエナから名付けた「シエナ會」主催での謝恩演奏會を行うことにしたとの経緯が分かる。同年の新聞記事にも「『お蝶夫人』の三浦環女史を始め現在イタリーにゐる原信子、喜波貞子、ベルトラメリ能子、關屋敏子さんなど世界的歌手を育てたアドルフ・サルコリー氏が日本に来てから丁度二十二年になる […] そのさびしい先生を慰めるためこの際謝恩音樂會を開きたいと申出たところ、謙護な氏はあくまでも固辭しこれを受けず『門下生の温習會ならやつてもよい』といふ許しがやつと出たので、お弟子達は勇み立ち、その會の名もサルコリー氏の生地シエーナの名をとって『シエナ會』と名付け…」との記事がみられ、パンフレットの内容と一致する(「東京朝日新聞」1933)⁽³⁾。これらパンフレットの挨拶文、新聞記事からは、恩師のために一堂に会し、恩師への恩返しをしたいとの強い思いが分かる。

来日以降、没するまで、サルコリは多くの演奏會に携わった。しかし、日本でサルコリが関係した演奏會の資料のうち、この「謝恩大演奏會」のパンフレットの他は、曲名、演奏者など、いわゆる一般的なものである。この「謝恩大演奏會」にだけ、サルコリの紹介が詳細に書かれている理由としては弟子の思いが考えられる。

東京朝日新聞の記事に「謙護な氏はあくまでもこれを固辭しこれを受けず」とあるように、サルコリ自身が日本滞在中に、率先して自分を表に出すこと、同時に自身の経歴を公にした痕跡は今のところみられない。また、1999年に筆者が弟子に行ったインタビューでは、「先生は、弟子を育てることに心血を注ぎ、何よりも弟子が活躍することだけを楽しみになさっていた。自分の名誉のことは全く興味がなく、何度かあった褒章の話もお断りになった」(丸山徳子 1999)⁽⁴⁾ というサルコリの人物像が明らかになった。弟子たちへのインタビュー、パンフレット、新聞より明らかとなった演奏會開催の経緯、このパンフレットの記載内容を見ると、弟子たちは、この「謝恩大演奏會」を通して、サルコリの偉業を世の人々に広めようとの使命を感じていたようにも思える。



(写真2)「謝恩大演奏會」パンフレット(2-3頁)。
右「ア・サルコリー先生に就いて」
左「眞摯な藝術家」シチリア・テアトラレ紙

パンフレットの中にみられる、日本国外でのサルコリの活動に関しては、①イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、ロシア各国の招聘により名手テトラチーニ(Luisa Tetrazzini:1871-1940)、アマート(Pasquale Amato:1878-1942)、チタルフォ(?)等と共に三十六種のおペラ物を歌い、その優秀な技量を全欧に認められる②三十八歳既にカルーソ、ゼナテルロ、ルチアに次ぎ世界男声六大高音歌手(六大テナー)としての榮譽を獲得、③「マダムバタフライ」の作曲家プッチーニと親交あり、ミラノ市のスカラ座に於てはテトラチーニ夫人と共に名歌手の双璧と称せられたりとある(「謝恩大演奏會」歌詞解説 1933)^(注1)。このうち、①のテトラツィーニとの共演については、共演した「リゴレット」のポスター写真が載せられている(写真2:右)。②の六大テナーに関しては、この他にも弟子の船越玲子が、後の『レコード芸術』の中で、「世界の六大テナーと讃へられ」と書いている(船越玲子 1952:61)⁽⁵⁾。また、同じ1952年に、帝国劇場の専務、山本久三郎も、日比谷公会堂で行われた「サルコリー先生追悼音樂會」のプログラム中に述べている(「サルコリー先生追悼音樂會」1952)⁽⁶⁾。日本では、このようにサルコリが六大テナーと言われていたとの記述が見られるが、日本のこれらの記事以外に、サルコリが六大テナーであったことを裏付ける資料は見つからない。③のプッチーニとの親交に関しては、『音楽新聞』の中に、「作曲家プッチーニにも親炙し、殊に名曲『ラボエム』が上演された時はアドルフの配役をやり評判を博し、當時若くて美しかつたサルコリイが作曲者プッチーニと公園などを歩いてみると、町の娘さんなどに『アドルフ、アドルフ』と熱狂させたこともあった」という記事も見られるが(音楽新聞:1936)⁽⁷⁾、これらの出典は確認できなかった。しかし、母親がサルコリの弟子であった広瀬忠子

(注1) ()は筆者の補筆

氏は「母は、プッチーニのサイン入りの楽譜を大事に持っていた」と言う（広瀬忠子 2012）⁽⁸⁾。サルコリとプッチーニの親交があったということは、かなり可能性が高いと思われる。

この他に、サルコリとプッチーニの親交を物語る資料として『ラ・ボエーム』の書き下ろしに際しては、その初演に抜擢され、プッチーニを感激させた由の先生」とある（船越玲子 1952:61）。「ボエーム」の初演に抜擢されたといわれているが、初演は演じていないようである（Sadie 1992:p.u.）⁽⁹⁾。

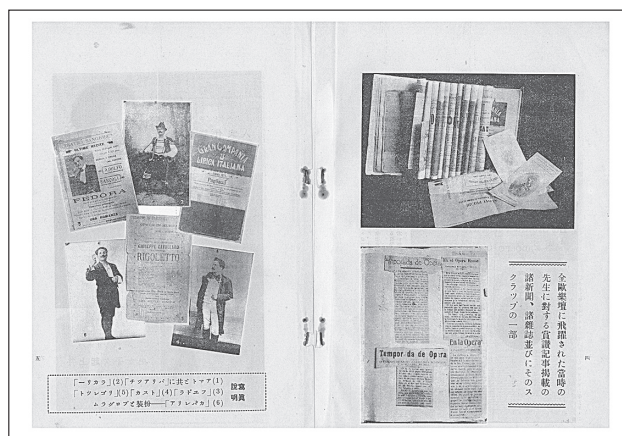
日本に滞在しているサルコリと、ヨーロッパのつながりを示す記事として、『東京日日新聞』に、「郷国のシュレーザー氏より欧州の音楽大家カルシー氏に比すべきボンケー、ルチアと共にミラノ、スカラ座に於いてプッチーニ氏の近作に係るファランキュラ、デリベスを演じ呉れ間じくやとの交渉を受けたるより旁々遂に帰国の意を決したるなるべし」とある。日本滞在中もイタリアより演奏依頼があったようである（『東京日日新聞』1912）⁽¹⁰⁾。

さらにパンフレットには「真摯な藝術家」と題して、新聞の写真と共にイタリアのシチリア・テアトラレ紙の批評が載せられている（写真2，左ページ）。サルコリが来日する3年前、1908年6月10日のものである。テアトラレ紙ということは、その名前から、劇場新聞であろう（Teatro：劇場）。一面見出しに、サルコリの写真、そしてサルコリの記事が掲載されている。記事の中には「アイダ、フェードラ、ロヘングリン、トスカボエムルチア、メフィストフェレ、リゴレット、カルメン、マノン、ヂョコンダ、カヴァレリーア、ファウスト、ファヴォリタ、パリアッチ、トラヴィアタ、サガ、バルロ、インマスケラ等、その才能は行くところとして可ならざるなく常に聴者を魅了した。」と、サルコリのレパートリーの多様さと、賞賛されていたことが読み取れる。また、「我等の親愛なる真摯な藝術家サルコリー氏よ、再び當市に君が明朗なる聲をかむことを希ひ、同時に榮光ある君の未來を祝福してやまないものである」との記事からは、シエナ出身のサルコリが、シチリアの人々から大歓迎を受けていたことが分かる。サルコリは、何度となくシチリアに呼ばれていたようである。

続いて、『全歐樂壇に飛躍された當時の先生に對する賞賛記事掲載の諸新聞、諸雑誌並びにそのスクラップの一部』との題で、写真が掲載されている（写真3）。パンフレットの文章が、当時確かに存在したそれらの資料を基に書かれていると考えられる。そうすると、このパンフレットに見られる記載はかなりの信憑性を帯びてくる。

現在は、それら一次資料はほとんど残っていないが、写真に見るそれら資料は、当時の日本人、そして弟子たちに

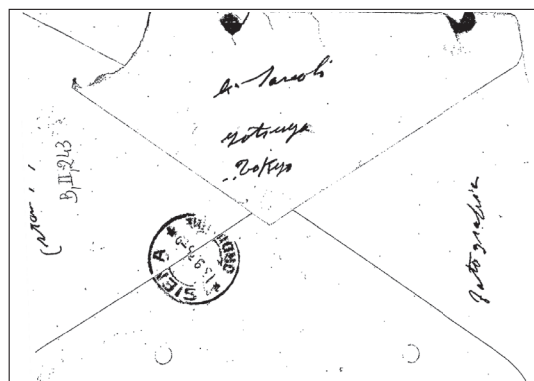
とって、突如日本に現れたサルコリの来日以前の略歴や活動を知る一つの重要な手がかりとなったに違いない。弟子たちはイタリアで活躍していた恩師を誇りに思い、自ら進んで功績を知らしめるようなことをしなかったサルコリに代わり、このパンフレットでサルコリの功績を世に広めようと考えたのであろう。そして、この「サルコリ謝恩演奏會」のパンフレット、新聞記事、また、来日する少し前のシチリアでの賞賛記事等を総合すると、サルコリは、プッチーニをはじめとするイタリア音楽界との結びつきを保っており、日本にいながらも、さしたる大きな時間のずれもなく、イタリアの情報を入手していたことが分かる。



(写真3)「謝恩大演奏會」パンフレット（4-5頁）。右「全歐樂壇に飛躍された當時の先生に對する賞賛記事掲載の諸新聞、諸雑誌並びにそのスクラップの一部」左「写真説明」(1) アマートと共に「パリアッチ」等

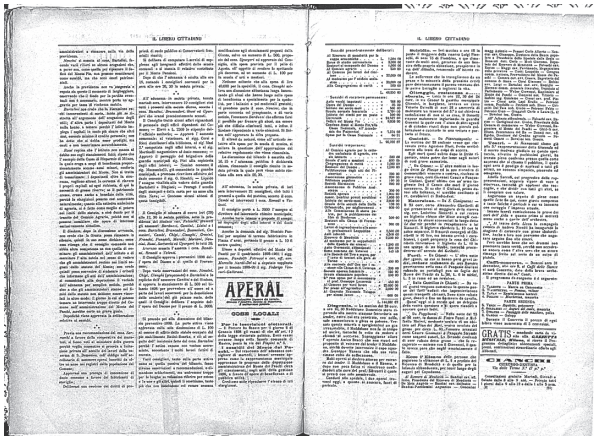
2-2 イタリアでの活動資料

筆者は、最初のイタリア調査の前年、シエナにある、歴史ある音楽院、キジアーナ音楽院にサルコリに関する資料の調査を文書で依頼した。図書館長よりサルコリに関する記事はないという返事であったが（1999.12）、その後の調査で、キジアーナ音楽院長宛のサルコリからの手紙、はがきが存在していることが分かった（写真4）。日本から送られた、それら手紙、はがきからは、サルコリが、キジアーナ音楽院との関係があったことが伺える。



(写真4) キジアーナ音楽院に保管されていた封筒。A.Sarcoli,Yotsuya,Tokyoの文字が見える。

また、2010年（シエナ市立図書館）と2012年（ミラノ市立図書館、ミラノ音楽院付属図書館）でおこなった調査では、サルコリ存命中のイタリアでの「Dizionario Universale de Musicisti（音楽家大辞典）」や他の音楽家辞典などには、サルコリの名前はみられなかった。しかし、サルコリの死後2年の後、1938年に発行された「Dizionario Universale de Musicisti」⁽¹¹⁾の中に「Tenore, n. nel 1866 a Siena, m. il 7 agosto 1936 a Tokio, da molti anni domiciliato al Giappone, dove insegnava il canto」（テノール歌手。1866年にシエナで生まれ、1936年8月7日に東京で没する。多くの年月、声楽を教えていた日本に住んだ。）という記載がみられた。



(写真4)

このほかに、サルコリの公演に関する記事が掲載された新聞記事を10件見つけた（写真4）。

それら新聞紙上でみる、サルコリの公演に関する演奏会評には「我らがシエナ人、アドルフォ・サルコリ（ジョルジョ・スッリ先生の弟子）に対し、一般人の関心が集まっていたのだが、それはまた厳しい競争をくぐりぬけ、貴重で重要な役においてデビューを果たしたからである。[…]デビューしたてとしてはまれな程の表現力がある。彼によって、観客に非常な熱狂を引き起こした」（『Gazetta musicale di Milano』1897）⁽¹²⁾、「サルコリ氏はその卓越した人間性と良い演技と申し分のない演奏によって完璧なロドルフォであった。[…]本当に特別な賞賛に値する」（『Gazetta musicale di Milano』1902）⁽¹³⁾など、イタリアでの演奏に対する観客の熱狂と、「ラ・ボエーム」の主役、ロドルフォを演じ、特別な賞賛を受けたとの記事が並ぶ。1897年はサルコリがデビューしたとされる年で、記事の中にも「デビューしたて」の言葉がみられる。また、1902年の記事は、取り上げられた他の演奏者に対しては「buono（良い）」が使われているが、サルコリだけは、「perfetto（完璧）」が使われている。記事の主旨は、オペラ全体に対しての批評であったが、特にサルコリの功績を讃える文章と

なっており、サルコリがオペラの成功に大きな役割を果たした名演を行ったことが分かる。ただ、これらはいずれも、サルコリが生まれ育ったシエナ地方の演奏に対する批評である。サルコリが一時住んでいたミラノ、またローマなどの大都市での演奏歴や演奏批評は今はまだ見つかっておらず、サルコリの評価はイタリア全国的なものであったのか、今後も調査する必要がある。

尚、注目すべきこととして、1897年記事の中に、ジョルジョ・スッリ氏の弟子であったことを発見することが出来た。これは、サルコリがどのような教育を受けていたか明らかにするうえで、貴重な情報である。

2-3 インターネット「La voce antica」⁽¹⁴⁾にみられるサルコリ

インターネット上で、サルコリの略歴、演奏歴などの記事がみられる。サイトには、サルコリの世界での演奏歴^(注1)プロフィールが記載されている。演奏歴には、1897年、サルコリが29歳の時にシエナで〈ジョコンダ〉のエンツォを演じたとある。その後フィレンツェ、ノート（シチリア）、アチレアーレ（シチリア）、カターニア（シチリア）、カラブリア、サレルノ、トラーパーニ（シチリア）、コラート、カルタニセッタ（シチリア）、マルタ、ベルガモ、ブカレスト（ルーマニア）、コスタンティノポリ（ナポリ）、ミラノ、バリャドリッド（スペイン）、ビルバオ（スペイン）、ログニェス（スペイン）、コルフ（ギリシャ）、ターラント、カイロ（エジプト）、シラクサ（シチリア）、ノヴァーラ、マニラ（フィリピン）の各地で演じたことが、オペラの題名、サルコリが演じた役、演奏年月と共に記載されている。

これによると、最初は、生まれ故郷であるシエナの劇場にて、その後、南、特にシチリアに多く呼ばれるようになり、さらに、ナポリ、ミラノといった大都市、ルーマニア、スペイン、ギリシャといったイタリア国外での演奏も増えている。1903年、サルコリが35歳の頃である。

サルコリが演じたオペラは、〈アイダ〉〈ジョコンダ〉〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉〈ラ・ボエーム〉〈パリアッチ〉〈リゴレット〉〈トスカ〉などであった。これらの初演をみると、〈カヴァレリア・ルスティカーナ〉は1890年、〈パリアッチ〉は1892年、〈ラ・ボエーム〉は1896年、〈トスカ〉は1900年である。サイト上で分かる範囲で、サルコリが〈ラ・ボエーム〉を演じたのは1899年であり、これは、初演からわずか3年の後の事である。

演奏歴と並んで記載されているサルコリの記述は以下である。『先に、歌の勉強をしてから、ギターとマンドリンの勉強をし、さまざまなコンサートで演奏をはじめた。1897年に、シエナの劇場で、〈ジョコンダ〉の演目でオペラデビューをはたした。1911年にゾニッコ・マニラ劇場の

シーズンの作曲をした後に、日本に行き、東京の帝国劇場でオープニング演奏を行った。慶応大学のマンドリンオーケストラとその場で演奏し、日本における、初の外国人教師およびコンサート演奏者となった。同時に歌を教え、数多くのギター用の作曲を残し、その曲を彼のオーケストラと一緒に演奏した。今でも彼の名声は無傷のままである。』(『La voce antica』2012)。

記事の出典は「La voce antica」に記されておらず分からないが、サルコリのプロフィールのうち、日本での活動はこれまで確認したところ正確に記載されている。各都市での演奏年月、演目に関しても、「サルコリ感謝演奏会」のパンフレットに記載されていたものと重なる。よって、これらの情報は信頼性が高いと考えられる。このサイトを見る限り、サルコリが多くのレパートリーを持っており、またいずれも主役級であることは興味深い。

3 まとめ

本稿では、サルコリの海外を中心とした演奏活動を明らかにすることを試みた。これまで日本で明らかににはなっていなかったサルコリの海外での活動歴、特にイタリアでの活動歴を明らかにした。サルコリのオペラデビューは生まれ故郷のシエナであったが、その後シチリアなど南地方で、さらにはイタリア国内にとどまらず、スペイン、ギリシャ、エジプトなど、国際的に演奏活動を行ったこと、また、イタリアでの現地調査で発見した賞賛記事により、サルコリ

がイタリアにおいて「テノール歌手」として受け入れられていたことが分かった。また、イタリアでのサルコリのレパートリーが主役級であったことはサルコリの歌唱能力を知るうえで非常に興味深い。

オペラの演目に関しては、初演からそう時間を経ずして上演を行っていた。このことは、サルコリはイタリアの音楽界の新しい情報を持ち合わせていたことを意味し、サルコリがその後数年のうちに来日していることは、サルコリがいわば直輸入の形でイタリアオペラ文化を移入していたといえる。サルコリの下から、三浦環、それに東京音楽学校を中退した原信子や関屋敏子、また喜波貞子が欧米に渡航し、活躍したのは、サルコリとイタリア音楽界のつながりがあってこそであった。

今回、サルコリの声楽の師匠の名前も明らかになったが、これは、サルコリがどのような教育を受けていたか、日本でどのような教育が行われていたのかを明らかにするうえで、重要な手がかりとなる可能性がある。また、本研究によって得た考察を一層明確にするためには、今回明らかとなったことの検証をさらに行うと同時に、この時代のイタリアやヨーロッパにおけるオペラや社会情勢、イタリアと日本のつながりの中で、サルコリの日本における意義や特質を明らかにしたく、今後の課題としたい。

[本研究は、文部科学省より科学研究費：若手研究B(21720059)の助成を受けたものである。]

注

- | | |
|--|---|
| (1) 「演奏歴」『La voce antica』 | 1900 |
| 1897 | 02 Trapani Teatro Garibaldi BOHEME (Rodolfo) |
| 12 Siena Teatro Dei Rinnovati GIOCONDA (Enzo) | 04 Corato Teatro Comunale FAUST (Faust) / RIGOLETTO (Duca) |
| 1898 | 05/06 Caltanissetta Teatro Regina Margherita BOHEME (Rodolfo) / FAUST (Faust) / FORZA DEL DESTINO (Don Alvaro) |
| 01 Siena Teatro Dei Rinnovati AIDA (Radames) | 1901 |
| 11 Firenze Teatro Pagliano LA PRIMA NOTTE di R.Brogi | 11/12 Catania Teatro Principe di Napoli BOHEME (Rodolfo) / FAVORITA (Fernando) / CAVALLERIA RUSTICANA (Turiddu) / PAGLIACCI (Canio) |
| 1899 | 1902 |
| 02 Noto Teatro Massimo Comunale BOHEME (Rodolfo) / MANON LESCAUT (De Grieux) / RIGOLETTO (Duca) | 01 Catania Teatro Principe di Napoli GABRIELLA di G.Serrao (Gianni) |
| 04/05 Acireale Teatro Bellini BOHEME (Rodolfo) / MANON LESCAUT (De Grieux) / RIGOLETTO (Duca) | 03 Malta Teatro Reale FEDORA (Loris) |
| 05 Catania Teatro Nazionale BOHEME (Rodolfo) / RIGOLETTO (Duca) | 08 Siena Teatro Della Lizza FEDORA (Loris) |
| 06 Siracusa Teatro Comunale GIOCONDA (Enzo) / FAVORITA (Fernando) | 10 Bergamo Teatro Nuovo BOHEME (Rodolfo) |
| 07 Catania Teatro Nazionale GIOCONDA (Enzo) | 1903 |
| 08 Catania Tempio dei Benedettini LA RESURREZIONE DI LAZZARO di L.Perosi (Storico) | 01/02 Bucarest Teatro Nazionale GIOCONDA (Enzo) / BOHEME (Rodolfo) / PAGLIACCI (Canio) |
| 08/09 Noto Teatro Massimo Comunale GIOCONDA (Enzo) / FAVORITA (Fernando) | 07 Costantinopoli Teatro Petit Champs MANON LESCAUT (DeGrieux) |
| 09 Salerno Teatro Verdi BOHEME (Rodolfo) / FAUST (Faust) / RIGOLETTO (Duca) Napoli Teatro Mercadante FAVORITA (Fernando) | 11 Bucarest Teatro Nazionale RIGOLETTO (Gilda) |

1904
11 Bucarest Teatro Lirico STAGIONE
1905
01 Milano Teatro Dal Verme GIOCONDA (Enzo)
11 Valladolid Teatro Calderon STAGIONE
12 Bilbao Teatro Arriaga CAVALLERIA RUSTICANA
(Turiddu) / FAUST (Faust) / LOHENGRIN (Lohengrin) /
TOSCA (Cavaradossi) / PAGLIACCI (Canio)
12 Logrones Teatro Herres PAGLIACCI (Canio)
1906
02 Corfù Teatro Comunale BOHEME (Rodolfo) / TOSCA
(Cavaradossi)
03 Taranto Teatro Paisiello BOHEME (Rodolfo)
10/12 Bucarest Teatro Nazionale BOHEME (Rodolfo) /
CAVALLERIA RUSTICANA (Turiddu) / FAUST (Faust)
/ PAGLIACCI (Canio) / TOSCA (Cavaradossi)
1907
04 Cairo Teatro Abbas CAVALLERIA RUSTICANA
(Turiddu)
05 Costantinopoli Teatro Varietes AIDA (Radames) /
MANONLESCAUT (De Grieux)
1908
01 Siracusa Teatro Comunale TOSCA (Cavaradossi)
05 Catania Teatro Sangiorgi CAVALLERIA RUSTICANA
(Turiddu) / FEDORA (Loris) / PAGLIACCI (Canio)
10 Novara Teatro Coccia FEDORA (Loris)
11 Catania Teatro Sangiorgi BOHEME (Rodolfo)
1909
01/02 Trapani Teatro Garibaldi BOHEME (Rodolfo) /
WALLY (Hagenbach)
03 Siracusa Teatro Comunale WALLY (Hagenbach)
1910
08 Castiglione delle Stiviere Teatro Sociale TOSCA

(Cavaradossi)
10 Bucarest Teatro Nazionale CAVALLERIA RUSTICANA
(Turiddu)
11 Manila Teatro Zorillo STAGIONE

参考文献

- (1) 直江学美 2010 「日本の演奏会プログラムより見た西洋音楽受容の一考察」。(金沢星稜大学人間科学研究第4巻第1号), 2010.9, 45-47頁。
- (2) 『謝恩大演奏会』パンフレット。(シエナ会), 1933.12.5。
- (3) 『東京朝日新聞』1933「孤獨に気も弱るわが樂壇の父アドルフ・サルコリー氏」。(東京朝日新聞), 1933.4.27, 5面。
- (4) 丸山徳子 1999 個人インタビュー, 6月7日。
- (5) 船越玲子 1952 「オペラの父 サルコリー先生の思出」。「レコード芸術」(音楽之友社), 第1巻8号, 59-61頁。
- (6) 山本久三郎 1952 「サルコリー氏追悼の辞」。「サルコリー先生追悼音楽会」。(シエナ会) 1952.6.6, 1頁。
- (7) 『音楽新聞』1936「我が樂壇の恩人／サルコリー翁遂に行く」3月下旬号。
- (8) 広瀬忠子 2012 個人インタビュー, 3月。
- (9) Stanley, Sadie, ed. 1992 *The New Grove Dictionary of Opera* (London: Macmillan).
- (10) 『東京日日新聞』1912「声樂家サルコリー氏去らん」。(東京日日新聞), 1912.6.16, 4面。
- (11) *Dizionario Universale de Musicisti* 1938. p.681. (Milano: casa editrice Sonzogno)
- (12) *Gazetta musicale di Milano* 1897.12.30.N.52-p.758. (Milan:G.RICORDI&C)
- (13) *Gazetta musicale di Milano* 1902.11.13.N.46-p.610. (Milan:G.RICORDI&C)
- (14) 『La voce antica』(2012.4.12 アクセス)
(<http://www.lavoceantica.it/Tenore/SarcoliAdolfo.htm>)